１．実施概要

（１）日時：平成２４年１２月１日（土）　１４：００～１６：３０
（２）場所：川西アステ６Ｆ　アステホール
（３）テーマ：「地域資源を活用したまちづくり」
（４）進行

14:00～14:05　開会
・開催の挨拶　川西市長 大塩 民生
14:05～14:15　国からの施策紹介
・内閣府地域活性化推進室次長 長谷川 新
14:15～14:30　基調講演
・流通科学大学特別教授 石原 武政
14:30～15:00　各地域における活性化事例紹介
・川西市長 大塩 民生
・府中市長 伊藤 吉和
・丹波市副市長 永井 隆夫
15:00～15:10（休憩）
15:10～16:25　パネルディスカッション
・コーディネーター：石原 武政
・パネリスト：ＮＰＯ法人いたみタウンセンター副理事長 村上 有紀子
㈱みらいもりやま２１マネージャー 石上 僚
街はカーニバルプロジェクト代表 荻田 雅仁
川西市長、府中市長、丹波市副市長
16:25～16:30　閉会の挨拶
・川西市中心市街地活性化協議会副会長 松下 親之
16:30　閉会

２．開会の挨拶

- 川西市の中心市街地は、阪急電鉄宝塚線、ＪＲ福知山線、阪急バスなどの公共交通機関が集中し、大阪の中心部より近く、利便性も優れているという条件から、昭和３６年頃より駅周辺に住環境が整えられ、密集地の市街地が形成されてきた。
- 川西市の中心市街地は複数の再開発ビルが集中的に立地するまちとして整備されてきた。現在は右肩下がりの経済情勢の中で、郊外の大型商業施設に消費者が流出しているのが現状であるし、建物の老朽化もしている。そこで平成２２年１１月に中心市街地活性化基本計画を策定し、川西市および各事業の出資体がお互いに連携協力して、各事業間の相乗効果を図っている。川西市のまちづくりをご紹介するとともに、全国の活性化に対する議論を深めながら新たなまちづくりのヒントが得られればと期待している。

３．国からの施策紹介

● 全国２１か所でシンポジウムを開催させていただいている。先進的な取組み事例や議論を通じて日本各地の活力向上になるような情報を発信し、共有しあうということを目的としている。中心市街地は顔であるが、全国各地で厳しい状況にある。この夏、日本再生戦略が定められたが、その中でも中心市街地活性化は重点施策のひとつとして位置付けられている。今まで続けられてきたものを検証しようということがいわれていて、このシンポジウムやアンケートなどで検証を進めながら、また今後の準備を整えていきたい。有識者の委員会も立ち上げて議論を始めたところだ。本日もぜひ活発な議論をしていただき参考にさせていただきたい。

● 内閣府の方もいろいろ施策があるが、地域によって特徴があると思うので、それぞれのニーズに合えば活用していただきたい。構造改革特区については規制の見直しで、ご提案があれば応援のための検討をさせていただくものだ。経済産業省では、中心市街地魅力発掘創造支援事業が創出される。まちづくり会社等が行うまちの魅力を高める知恵の掘り起こしとか、まちの魅力を発信する試みでリスクが高く民間では難しい取組みなどを支援する事業である。国土交通省では、都市機能の集積促進ということで「暮らしにぎわい再生事業」、「まち再生出資業務」、「まちなか居住の推進」「身の丈再開発」などがある。このように様々なものがあるが、現場のニーズに合わせて使いこなしていただければと思う。

４．基調講演

≪地域資源を活用したまちづくり≫

● 川西市は高度成長期の市街地開発を先頭切ってやってきた都市で、６０年代７０年代通して、人口が一気に伸び、その伸び率はおそらく日本でも有数の勢いがあった。開発された郊外の団地にお住まいの方々が市の人口の４割ぐらいだが、どう定着し、市民としての愛着を感じ、中心市街地をどう感じているのかがこのまちの中心市街地問題を考える時の最大の鍵だと思う。

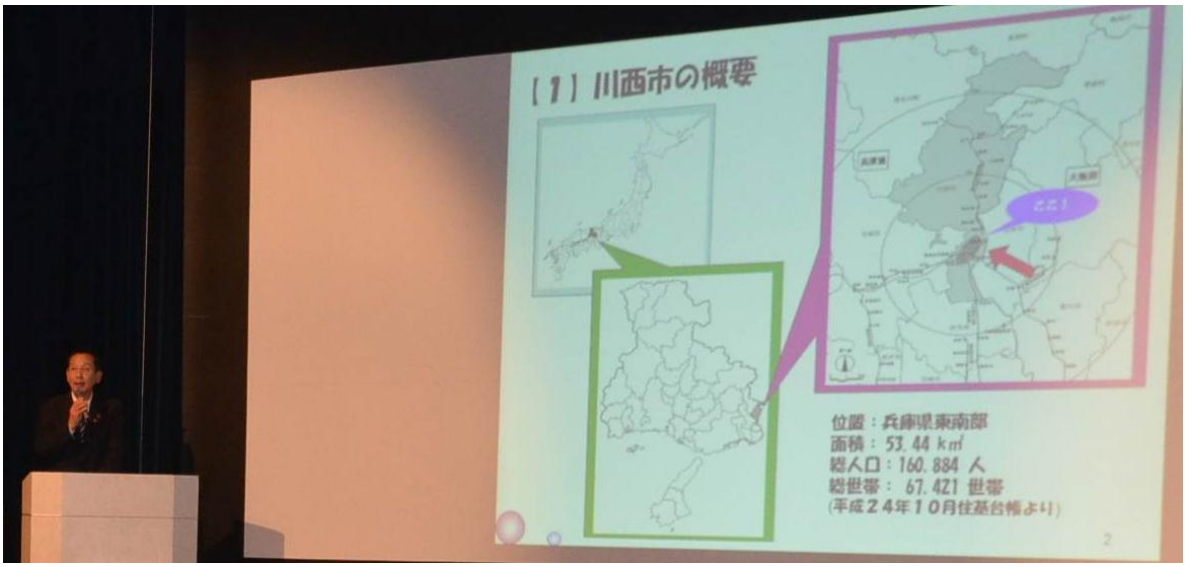
● まちづくりの定義として、外科的なまちづくりと内科的なまちづくりがある。再開発や区画整理などでまちの構造を大きく変えていくのが外科的なまちづくり。ふれあい、つながり、コミュニティといったものが内科的なまちづくり。この両方があいまって始めて、本当のまちづくりがあると考えている。川西市の場合は、外科的なまちづくりの上にどうやって内科的なものを盛り込んで市民を巻き込んでいけるかだと思う。

- 人と仕事とお金をぐるぐると循環させていくもののひとつが商業。対外的視線（街商人精神）をもった商人を支えていくことが大事だ。そういう街あきんどたちは企業家商人とは違ったつながりを持っている。アメリカ・カナダで出会った言葉「Ｐｅｏｐｌｅ　Ｐｌａｃｅ」は、買い物をするためだけに集まるのではなく、ぶらっと、ゆったりするために多様な人が集まるたまり場のようなところのことで、アメリカにおけるＰＰＳの考え方は、人が集まり、経済的に持続し、地域の発展に影響を与えるアメリカ版「三方よし」だ。
- 人のつながりを通して本当の意味での地域資源になる。コミュニケーションをどうつくるかは、実際に一歩踏み出していく、働きかけをしていく以外にたぶん方法はない。ぜひそういう踏み出しをして、川西市を心のふるさとにするよう一歩でも積みあがっていけばいいと思う。

５．各地域における活性化事例紹介

（１）川西市

- 中心市街地活性化基本計画は平成２２年１１月に認定を受けた。「ハート＆アートな街　かわにしのせぐち」をキャッチフレーズに、買い物をする人や商売をする人にとって魅力的で活力のあるまち、訪れる人や暮らす人にとって楽しみながら回遊したくなるまち、居住者や利用する市民にとって安全で便利なまち、の３つを基本方針に、年間商品販売額と歩行者通行量の増加を数値目標に定め、進めているところだ。
- ハード事業としては、中央北地区整備事業があり、せせらぎ遊歩道の整備や中央公園、公益ゾーンの配置、さらに集客ゾーンで新たな人の流れをつくりだすとともに、産業・業務ゾーン、生活ゾーンを配して街全体の調和を考えている。平成２３年には「まちづくり方針」を策定し、医療、住宅、集客など多機能が連携する次世代型複合都市を目指している。民間活力の導入に向けて鋭意努力をしている。
- ソフト事業では平成１９年度より毎年１１月に、市、商工会、ＪＡさんが共催をして「川西まつり」を開催している。このプレイベントとして大震災の鎮魂の意味も含め「音灯り」も開催されている。地元飲食店などの協力のもと「きんたくんバル」も４回目を迎えた。中心市街地の活性化は、ハード事業とイベントなどのソフト事業をどのように効果的に連携させ、どのような相乗効果でもって推進していくかが課題と思う。大切な地域資源を有効に活用して活気ある中心市街地の活性化に取り組んでまいりたい。



（２）府中市（広島県）

- 人口減少の時代でも、生き生きと暮らせるまちをどうしたらつくれるかということでやっている。それが「生活中心街の育成」だ。基本計画の目標は、「賑わいの創出、歩いて暮らせる地域の形成」だが、この歩いて暮らせる地域という部分が超高齢化社会においてポイントになると考えている。
- 主な取組みとして、統合小中学校をつくったが、これは空洞化した中心市街地の奥の方に強い開発を入れた。活力を取り戻すためのセオリーでもある。またお祭り広場といった市民が活動できるスペースを設けた。統合小中学校というのは、小中一貫教育のシステムを取り入れたものだ。お祭り広場をつくったら大変喜ばれ、イベントや朝市、早朝の体操やグランドゴルフなどしょっちゅう人が集まる場所になった。また、まちの歴史的遺産である「恋しき」を買収して再開発した。まちのお好み焼きに府中焼きと名付けたら大変盛り上がり、Ｂ－１グランプリにも出展し、府中の中心市街地で全県規模のイベントも実施出来るようになり、６．５万人を集めた。
- 第一期計画はまちの真ん中をやったが、第二期計画は、現在のところ認定に向けて進めているところで、ＪＲ府中駅周辺を中心に、「快適に住み続けられる集約型都市」を目指して取組んでいく予定である。

（３）丹波市（兵庫県）

- まず基本理念を「時の太鼓が響き、とどく“ロマン城下町かいばら”の創造」とし、基本方針を、歴史・文化資源を生かす地域個性の創出、多世代が住み・働く、暮らしの環境づくり、多様な主体が参画・連携するまちづくり事業の創出の３点として取組んでいる。
- 主な事業として、まちなみ修景事業では、商店街を中心に城下町の雰囲気を残したまちなみ形成をやっていて、今年でほぼ完了する予定だ。もうひとつはテナントミックス事業で、ＴＭＯにお願いして空き店舗や古民家を活用し城下町の雰囲気に合致した店舗ということで進めている。これは経産省戦略補助金を活用している。例として丹波の野菜と鹿料理の店、バームクーヘンの専門店、和菓子店などがある。また、昔小学校だった建物を活用する大手会館活用事業では、プロデュース会議を設置してその活用方法を官民で検討している。その

他として、道路美装事業、柏原法務総合庁舎整備事業、コミュニティーガーデン整備などを進めている。

- 新たな動きとしては、関西学院大学との連携でスタジオを設置してもらい、イベントなどへの若者の参加でまちに活気がでてきた。もうひとつは、「丹波ハピネスマーケット」で、丹波にこだわった素材のマーケットを定期的に開催している。今後も、空き家・空き店舗など先導的事業を全市に広げること、大型店・ロードサイド店との差別化による共存の仕組みづくり、さらにまちなか居住施策の見直しなどの課題と取組みながら中心市街地活性化を進めていきたいと考えている。

６．パネルディスカッションの概要

- （荻田代表）川西流文化イベントということで、川西まつりの前夜祭「川西音灯り」を開催した。キャンドルは市民の方の手作りによるもので、灯りと良質の音楽とでつながっていこうというイベントだ。また郷土館を利用して「東谷ズム」という新しいイベントを商工会さんとともに、まちはカーニバルプロジェクトが主催させていただいた。こちらは人、モノが動く事で経済が回るので実践型のイベントとして位置付けている。
- （村上副理事長）伊丹市は、基本計画によって外科的なまちづくりがあり、まちの真ん中に広場ができ、図書館などの交流の場ができ、ピープルプレイスがたくさんできた。そして今、広く深く内科的まちづくりを行っている段階。私は３年前まで専業主婦だったが、街歩きのイベントに参加したのがきっかけでコンサートの企画・運営、まちなかバルのお手伝いをしたりして商店主や商店街の方々とつながることができた。現在ＮＰＯ法人の副理事長となり、まちなか映像祭を主催したり、空き店舗を利用した企画を行ったり、様々なイベントを展開し、まちの商業者とかをゆるやかにつなげるお手伝いをしている。
- （石上マネージャー）商店街の会議に出たら、まず年齢層が高い。団塊世代が若手で、６０、７０、８０代の方が主になっている。若い人を連れていったが続かない。発言させていただけない。とにかく楽しいことをやりながら、無関心だった市民の方が関わってくれるようにすること。ただ、楽しいだけでは商業者の方は難しいので、お店にお金が落ちる仕掛けが必

要だと思う。そこで「１００円商店街」や「まちコン」に取り組んだりしている。まちコンは今、外部の業者がやるようになってきているが、自分たちでもできることなので、もっと若者を立ちあがらせ、まちを盛り上げてやろうということで活動している。まちのためにというより、自分たちが楽しいからやる。結果的にそれがまちの活性化につながるという発想で活動している。

- （川西市長）お話を聞いていて大変力強く感じる。ただその世代の気になるところは、目先のメリットはないかもしれないけど、先人の知恵とかはあると思う。まわりがあるから自分も商売できる。やはり個人プレーでは限界があると私は思う。最後は結局群れているというふうにはならないから、少しそのへんのご意見を伺って、われわれのまちづくりにも活かしていきたいと思う。
- （石上マネージャー）事業やイベントをやるときは集まるが、いくつかグループができる。大きなグループになればなるほど、全員が一致しない。若い人も商店街に入って欲しいが、なかなか説得ができない。ただ理事長の気持ちもわかる。その間をどうしたらいいかなというところを模索しているところだ。
- （川西市長）私は地域のことは地域で、ということを市政の中で打ち出している。一定の権限や財源も与えようかという模索もしながら２年間きている。その根底にあるのはやはり自分たちのまちをどうこれから盛り上げていくのかというのに参画してほしい、それにはそれなりの群でやっていかなければならない。府中市さん丹波市さんもお話があったが、人口減少を経験しているということでは、私たちにとっては先進地だ。皆さま方の発想をまちづくりにどういうふうに活かしていけるのか、個が集まって群れになっていく必要があるのではないかなと感じている。
- （府中市長）まちづくりは面白い。達成感もある。その達成感をどう発展性、継続性のあるまちづくりにつなげられるかが難しい。年配の方と衝突している話が出たが、私のところもまったく同じ。まちづくりにお金を出さないということでやっているが、そうすると本当にやる気のある方が集うようになる。役者が入れ代わる。住民運動は、いろんな情報を駆使できる若い人と、地元の故事来歴を知っている古い人たちがいっしょにやることがいちばん成功するという研究事例があるそうだ。それぞれの一致点を見出し、良さを引き出して力を合わせることで、安定性も継続性も出てくると思う。

- （丹波市副市長）一般の方がどういう形でまちづくりに参加していくかだと思う。丹波の場合は歴史的なまちだということで固定化している部分がある。商工会やまちづくり協議会など既存の組織に外部の方をうまく巻き込んで新しい要素を入れて、まち全体にあげていくようなきっかけになればいいのでは。
- （村上副理事長）お店や行政をつなぐやわらかいジョイント、そういう人がたくさんいたらいいと思う。みんなで助け合って、行政とか市民とか商店主とか関係なくみんなで何かやって楽しかったということが次につながっていくと思う。そういう面白くするためのジョイントであり役目の人がたくさんいるまちというのが大事だと思う。
- （石原先生（コーディネーター））もう少しやわらかいつながりを持ちながら、それを安定的にひっぱっていかなければならない。それがこれからの組織の課題かと思う。まちづくりという言葉が出てきたということは、商業だけではまちはできないということと思っている。だから組織というものをもう少し開いていく必要があるのだと思っている。以前、「まちは劇場、通りは舞台」というキャッチフレーズを富山の中央通り商店街がつくったのだが、そういう舞台の上で踊る人たちがいてネットワークが広がっていく。そういう事業をつなげていく中で、キーマンが重なって安定性を新しくつくっていくことがこれからの課題だと思う。

７．閉会の挨拶

- 非常に熱心なディスカッションで、もっと聞きたいと会場の皆様も感じておられるのではないか。興味を持たれた方は、それぞれコンタクトをとっていただきたい。そういうつながりが、まちの活性化につながるのではないかと思う。本日、この川西市の地で中心市街地活性化等全国リレーシンポジウムｉｎ川西市を開催させていただいたが、このように多数の皆様にお集まりいただきあつく感謝と御礼を申し上げる。私自身もあらためて意欲的に取組まなければならないと決意したところだ。今回のシンポジウムは川西市の財産となるもの。今後も様々な形で皆様と交流が持てれば幸いに思う。

８．閉会